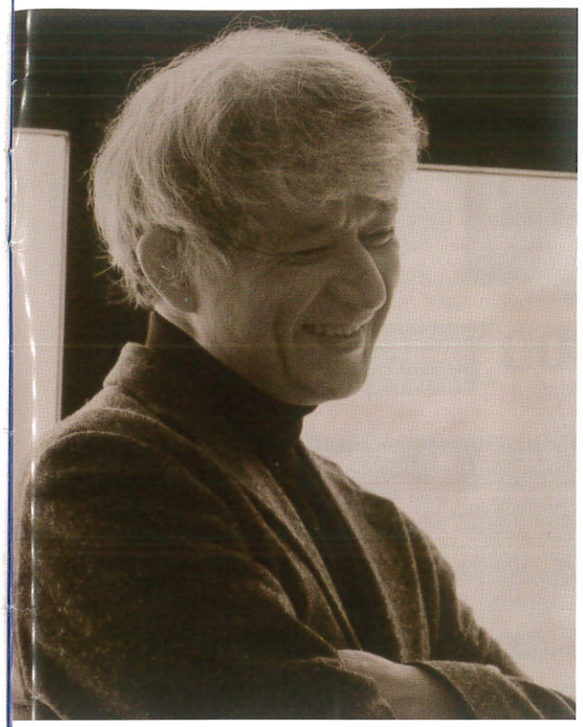


北海道大学副学長
逸見勝亮 理事 インタビュー

羽ばたけ、才能貧しき未来形よ！

はじめまして、今日はよろしくお願いいたします。

はい、はじめまして、それでは参りましょう。

まず、北海道大学における逸見理事の役職はどのようなものでしょうか？

北海道大学の理事、副学長、担当の領域は広報と評価。図書館長・大学文書館長もしていますね。それから教育学部の教授を兼任しています。

多忙な役職でございますね。それでは北海道大学の逸見理事から見た道内教育の現状とはどのようなものでしょうか？

受験者、合格者の比率は北海道と道外が半々で、道内は道央圏が中心。僕が入学した頃は、昨今よりは入学者が地域的に広がっていたものです。学生を募集する側からみると、地方都市の高校の人材発掘をどのようにできるかということだね。

例えばAO入試の仕組を変えれば、道内各地から優れた能力を発揮できるような人物を発掘できると思いますね。もっと地方に人材がいるはずと考えています。

あとは、大学に行くと地元を離れるっていうのが矛盾ですね。大学に行くのがどのようにいいことなのか。都市部への人口集中は、大学進学と一体で進んでいることなので、疑問に思っていることでもありますね。

確かに、大学へ行くことにはそのような問題がありますね。それでは次に北大生のイメージとはどのようなものでしょうか？

モロ北（そのまま北大という意味）だね（笑）。僕はそもそもひとまとめにしたイメージというのを考えない。要するに色々な人がいる。僕の友人で会社の人事関係をしている人がいて、「北海道の学生ってのん気かな。自分を売り込むということが、あまり上手ではない」と言っていたね。彼も北海道出身だけれども（笑）。時間がかかるタイプが多いらしい。確かにそうかもしれない。人間は人間を集団でイメージして見たがるが、僕の場合、みんな違う、一人ずつだと。モロ北というのは便利だから使っているのであって、それは遠まわしに揶揄するずるい言い方かな。じゃあモロ北って何人いるのだろう？と。学校はいつも集団で見るけど、実際には一人ずつを見てもいるわけだ。イメージで答えた場合、そうじゃない人もいるし、それに当てはまる人もいる。

誰もがみんなと一緒と言い、みんなと一緒ではないことを恐れている。それでも私は私と言い「十把一絡げ」にされることを厭がっているでしょう。

あえて言えば、北大生がどんなイメージかというのが当てはまらないのが、北大生のイメージ。それぞれが個性的ということかな。それぞれが個性的で、枠や尺度では測れない、個性と可能性を持っている。

大変興味深く、参考になります。それでは大学生に望むべきもの。大学生へのメッセージをいただけますでしょうか。

一つは、高等学校の勉強と大学との勉強はどのように違うのかを考えて欲しい。つまり、大学とは自分で勉強する所であり、その知識を習得、獲得するということについて高校と大学とどう違うのかということを考えて欲しい、ということだね。

もう一つは、高い水準のもの、優れたものに接することが必要。何が優れたもので、どのようにしてわかるかは、その人に委ねられる。どんなふうに努力しても、逆立ちしてもあれには到達できないかもしれない、そういうものを知ること。感性の問題でもあるけどね。別な言い方をすると、尊敬できる先生に出会えるのがすごくいいと思いますね。教わる立場にいて人間を見定める。これは重要な指標だと思う。大学時代の友達とは高校の頃の友達と違う。どうしてだろうか？それも考えて欲しい。

尊敬できる教師、学問の上での先輩に会えるかもしれない。それは与えられるものではなくて、自分で見出すものだ。この本を読んだほうがいいと言われた時に、その本を読むかどうかだと思うよ。何故これを読めと言う必要があったのか。一旦は従ってみるのもいいかもね。

最後は、青春だね。青春とは己と戦うことだ。何を素材として戦うかは人それぞれ。自分との葛藤というのがいつでもあるけど、勤める、社会的に自立するという一歩手前の状態だから、それ以前とは違う。入学するときより、卒業するときの方が、覚悟が大変だよね。どの仕事で生きるか、一生の仕事にするのか、人生で非常に重要な転機。その意味で、この時の青春とは自分との戦いだね。卒業後の進路を決めるときは、重く、しかも非常に不確かなものだ。リスクを負いながら、それでも色んな選択肢があると思う。

それらをまとめると、やりたいことをやる、だけど、自分で考えるということだね。やりたいことだけをやっても成長はできない、やらなければいけないことをやる。その道の先輩に学び、それを上手に、きちんとできるかどうかってことだね。

例えば、勉強のことでいうと、それまでの蓄積をきちんとふまえているかが大切。それは、必ずどの領域でも問われることだ。物知りとは違い、自分に何が必要なのかを自分で選択する。

就職のときの面接で、大学で何をしたか聞かれるが、大学とは勉強する所であるから「あなたは何を勉強しているのですか」と聞くと、その人のことが一番良くわかる。肝心なことを聞くことが、その人のことを知るのに一番重要なのです。

好きなことをやるには、そのことについてよく学ばなければならない。

数多くのメッセージありがとうございます。それでは逸見理事の趣味というものは？

僕は鳥になりたいね（笑）。というのも野鳥をみるのが好きでね。わざわざどこかに見に行くとかではなく、通勤や、どこかに出かけたときに見かける程度。鳥の「生態」に興味があってね。例えば「ヤマガラは次にどの枝へ行くのか？」と考えるね。あのスズメはオスかメスか。どうやって鳥同士は見分けているのだろうか（笑）。鳥は何をしているのだろう、と考えるのが好き。趣味は鳥になりたい（笑）。飛びたいということとは違うけど。昔はマヒワを捕まえたね。辛抱強くザルと棒と紐でね（笑）。

座右の銘はありますか？

ないかな（笑）。本当はいろいろあるけれど。それを常に探している、ということだね。くさいセリフは好きだけど（笑）。僕は言葉の力を信じていてね。次の文は去年の教育学部の卒業式で述べた一部だ……

学生生活の集大成である卒業論文のどれもが、教育学にとって永遠のテーマである「総合的な人間像」に連なるものでした。僕は、卒業論文発表会の知的興奮、知的刺激、あなた方の緊張した顔や声を思い出しそのたびに心が躍ります。

あなた方がここ教育学部で得たのは、知的な達成を慙愧あるいは後悔、先への不安と多少の自信またはがさつな己惚れ、高い矜持と繊細な韜晦。そしてそれらがない交ぜになった「煩悶を凝視しながら困難に立ち向かう力」です。

僕はあなた方が得たものを共有し、日々直面する煩悶や困難をも共にしながら前へ進みたい。

手塩にかけたみなさんは、僕の誇りです。

「才能貧しき未来形」よ！
いざさらば！
いざ行け！

泣いた学生もいて、「やった」と思ったが、実は僕も泣いていたんだ。

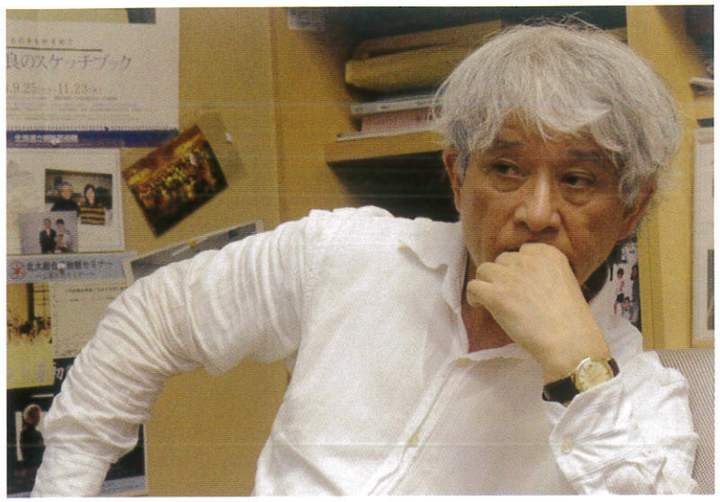
感想

とても気さくな方で、参考になるメッセージならびに考え方をご教授いただきました。感性がすばらしい方で、個性というものを感じる方でした。趣味の鳥のお話はとても面白く、まるで少年時代に戻ったようにお話ししてくださりました。学生からの信頼が厚く、雪祭りでは学生が逸見理事の雪像を作るような人気振りでした。

今日は新しい角度から物事を捉えさせていただけるようなインタビューでした。

インタビュアー・村上雅亮

北海道大学 逸見 勝亮 副学長



本日はお忙しい中、本当にありがとうございます。よろしくお願いします。

よろしく。

ではまず経歴をお話ししていただいてよろしいですか。

出身は北海道室蘭市、出身高校は室蘭栄高校で、大学は北海道大学教育学部、1966年卒業。学生時代は勉強！それしかないだろ（笑）。

そうですね（笑）。学生のころ部活などはされていましたか。

中学生のときは自分を変えなくてはいけないと思いバレー部に入ったのさ。九人制だけどね。中学三年間がんばったけどチームは強くなかったな（笑）。高校のときは勉強だね。

ありがとうございます。先生は北大に入学してから今までずっと北大と関わってきたわけですが、今と昔で違うところなどはありますか。

良くなったよね（笑）。実際自分が学生のときと教員になってからでは大学の見方が違うから、何とも言えないが、学生は変わっていないと僕は思う。学ぶ機会が与えられて、学問にどう意味を見出すか。学生だったら何のために勉強するのか、ということを一度は考えるよね。そこは今も昔も変わらないと思うな。だから、今の学生は勉強をしなくなったといわれるが、別にそんなことはないんだよね。そうだ、昔の学生はクラス雑誌というのを作っていたんだよ。今は作っているかわからないけど。「曙光」というタイトルで、みんなで自己紹介を書いたり、悩みを書いたり、失恋の話とか、いろんなことをみんな書いていたよ。昔は今のメーリングリストみたいなのがなかったから、雑誌の形で情報を発信していて、情報を発信するということにおいて、手法は違うけどそれも今と変わっていないと僕は思うな。

クラス雑誌をみんなで作るということはすばらしいことですね。さて、先生は副学長として北大に勤務されているわけですが、副学長としての学生との関わりはどのようなものですか。

たまにあなた方のような人が来るだけだよ（笑）。授業を週前期３コマやるだけ。そこで学生と関わるだけだよ。

たまに私たちのような人が来て、おそらく北大のセールスポイントとなるものを聞かれると思うのですが、よろしければお聞かせください。

一つは他大学よりも広いキャンパスかな。川が流れていてとてもきれいなキャンパスで僕は日本一だと思うな。本州から来られる先生方はみな「いいですね。」と言うし、春はもちろんきれいだし、冬も静かに雪が降っている中でかすんで見える風景もきれいだよ。季節ごとによって異なる風景がやはりきれいだな。もう一つは日本で一番多い12学部。総合大学として、学部選択の幅が広いし、他学部の授業も受けることができ、多様性と奥深さを持っているということだよ。また、少人数教育を徹底していること。ゼミの生徒の人数は他大学よりも少なくなっているので、生徒一人一人に熱心な教育ができていると思うな。それから、道外生が多いこと。全都道府県から学生が来てる。今年は46パーセントが道外生だった。

道外生はほんとに多いですよね。やはり北大のそういった魅力で集まるということもあると思うのですが、他に道外生を集めるための取り組みは行っていますか。

道外生は基本的に北海道の大地にあこがれるということがあるかな。特に特別なことはしてないよ。説明会はしているけどね。東京で説明会を行ったり、アドミッションセンターの先生が平成17年度から３年間で約２６０の高等学校に出かけてモデル授業というのを行っているよ。昨年は環境問題をテーマに全国28校で「プロフェッサーヴィジット」という「出前授業」も行った。僕の周りの北大出身の先生は、北大に来たのは「北海道の自然にあこがれて」、「親から離れたくて」という理由をあげるね。「北の大地で自立を」っていうのがぼくのキャッチフレーズ。

それでは、若者に期待していることがあればお願いします。

やりたいことをやればいいんじゃないか。今やりたいことを精一杯やる。他にはないな。期待はずれな回答だったかな（笑）。やりたいことをやって、そして後悔するんだよ。そうやって人は成長していくんじゃないかな。

では最後に北大に行きたいと思っている高校生に一言お願いします。

たくさん来てほしいな（笑）。北大はさっきも言ったように学部が多く選択肢が広く自分のやりたいことを見つけることができる。自分の力を試すために、希望を求めるために、北大にぜひ来てほしい。

このインタビューを通じて、いろいろな面から北大のことがわかり、北大の素晴らしさを再認識することができました。今回のインタビューに答えてくださいました逸見副学長、ありがとうございました。

（北海道大学　小向）

大学訪問 2008